ことのできぬ商人の中には、自衛上武器を携帶し、商道通じ難き場合に武力を行使してその目的を達するものが現はれ始めた。これ卽ち支那が倭寇と稱して恐れた武裝商船隊であつて、次代に於いて盛んに活躍するに至るのである。

當代の貿易港は日宋通交の場合と同じく、我にあつては博多、彼にあつては慶元であつた。貿易の方法や貿易品目の如きもまた前代と大差がなかつた。貿易に伴なつて彼我僧侶の往來、文化の交流が行はれたこともまた同樣である。殊に渡日僧には德風高く、儒・佛二道に通じ、詩文をよくするものが多く、當時のわが國民の精神生活に大いなる影響を及ぼした。また一寧一山の如く、元の使命を帶びて來朝し、遂に建長寺に住して我が國に歸化し、後宇多上皇に召されて南禪寺に移住した出色の僧もあつた。

建長寺船

建長寺造營料唐船警固事、自今月廿一日迄來月五日可被警固候、仍狀如件。

正中二七月十八日　　惠　雲（花押）

中村孫四郎殿

（廣瀨文書）

第四節　新文化の樣相

神祇思想の振興

一神道思想の展開　前代に於いて著しく低調化した神祇崇敬の精神は、鎌倉時代に入つて頗る振作せられた。後鳥羽天皇は、建久二年（一一九一年）三月宣旨を以て、「國の大事は祭祀に過ぐるはなし」と仰せられ、諸社の祭祀を勤仕すべき旨仰せ出され、順德天皇は、禁祕御抄の卷頭に賢所と題して、「凡そ禁中の作法、神事を先にし、他事を後にす。旦暮敬神の叡慮懈怠無し。白地（あからさま）に神宮幷びに內侍所を以て御跡となさず。」と記し給うた。後堀河天皇・龜山天皇もまた、新制を定め給ふ毎にまづ第一に祭祀を興すべきことを掲げさせられた。幕府に於いても、代々の將軍・執權皆敬神の念に厚く、賴朝は特に皇大神宮を崇敬して神物を奉納し、御厨の安堵並びに寄進をなし奉り、また鶴岡八幡宮を改築してしばしば社參を行つた。泰時は貞永式目を編するに當り、その第一條に、神社を修理し、祭祀を專らにすべきことを命じてゐる。

廣く國民の間にも神祇崇拜の念は盛んとなり、祖神や產土神の祭祀が行はれ、武士の間では敬神の精神殊に淳厚なるものがあつて、石清水・宇佐・阿蘇・熱田・三島・鹿島・鶴岡等の諸社がその崇敬の的となつた。

神道の勃興

神祇崇拜の精神の淳化と勃興とを基調として、神道思想が興つて來た。伊勢外宮の神官度會氏によつて唱道せられた所謂伊勢神道が卽ちこれである。その思想は、儒・佛・道殊に陰陽思想を以て潤色せられたものであるが、その要は、內外神宮の尊嚴なること、我が國が神國であつて、國家は神の加護によつて安泰を得、神は國家の擁護によつてその威を增すといふ相互一體の相關關係と、萬事につけて本末左右の秩序を重んじ、特に正直淸淨の德を崇ぶべきことを說くものである。その經典ともいふべきものに、鎌倉時代初期にできた神道五部書があり、末期に度會家行の著述になる類聚神祇本源がある。北畠親房の神皇正統記・元々集・二十一社記、僧慈遍の舊事本紀玄義・神風和記は、神道思想の精華を發揮したものであつた。

神祇思想の昂揚につれて、前代に行はれた佛を本地とする垂迹說に對して、本地佛を否認し、または神を本地とすべきことを主張する神道思想が現はれた。

新宗派の起立

淨土眞宗

二新宗派の興起　平安時代に於ける旣成宗敎の頹廢と世相の轉變とは、人心をして淨土思想に歸嚮せしめ、遂にその末期に至つて淨土宗の成立を見た。鎌倉時代に入つて淨土思想はますます盛行したが、さらに親鸞及び一遍によつてその敎旨に本づく新宗派が形成せられ、一層の進展を示した。親鸞は、京都に於いて法然にその敎を受け、法然がその門弟の他宗誹謗の罪によつて土佐に流された頃から、東國に赴いて敎化に力め、敎行信證を著はして眞宗の敎義を確立した。眞宗は、當代に於いてはなほ盛行するに至らなかつたが、次代に入つて大いに發展し、室町時代末期には社會上の一勢力を形成するに至つた。

時宗

一遍は同じく淨土宗より出て時宗を開いた。彼は建治二年（一九三六年）熊野權現の神託を蒙つたと稱し、智愚善惡一切を忘れて念佛すべしと說き、諸國を遊行して民衆の敎化に力めたので、遊行上人の名を得た。

日蓮宗

淨土宗の二派に對して天台宗からも新たに日蓮宗が起つた。日蓮宗は日蓮の創唱にかゝり、法華經八卷の妙義を南無妙法蓮華經の七字の題目につづめ、その唱題によつて成佛すべきを敎へた。彼は自說を主張するに急で、他宗を激しく誹謗したため、しばしば法難に遭遇した。

禪宗の傳來

かく他力易行の敎が流布せられんとした頃、一方海外からは自力宗たる禪宗が渡來した。禪は早く奈良時代に支那から我が國にもたらされ、爾來入唐・入宋の留學僧の手によつて傳來せられたが、未だ社會に弘通するまでに至らなかつた。しかるに鎌倉時代に入るや、禪は新たなる宗派として獨立し、始めて世に行はれるに至つた。卽ち榮西は、再度の入宋に當り、彼の地で臨濟禪を修めて歸朝し、佛敎の至極が禪であることを强調したが、南都・北嶺の激しい反對に遭ひ、榮西は遂に關東に下り、將軍賴家の保護を得てその宗旨の弘通を圖り、建仁寺を開いた。しかし、この寺はなほ延曆寺の末寺として台・密・禪兼修の有樣であつた。この時代に、宋でも禪宗が盛んであつた。鎌倉時代の中頃から蒙古の宋に對する壓迫が甚しくなつたため、宋の禪僧

臨濟宗

にして我が國に來朝するものが多くなつた。時賴は、宋僧道隆を鎌倉に招き、建長寺を建てゝその開祖とし、ここに鎌倉の地に始めて禪寺が營まれた。ついで時宗は人を派して祖元を迎へ、圓覺寺を建てゝその開祖とした。また弘安の役後、一山一寧の如き名僧も來朝した。

曹洞宗

臨濟宗についで榮西の弟子道元によつて曹洞宗が宋から傳へられた。道元は、承久の變後、入宋して曹洞禪を修め、歸朝して越前に永平寺を建立した。道元は世塵を避けて專ら修行に精進し、坐禪によつて悟道に達した。禪宗の嚴格なる修行は、武士の修錬と相通ずるところがあり、禪宗の敎義は武家の間に次第に行はれた。

かくの如く、禪宗が特に武士の間に受容せられたのは、禪僧の質素なる生活や、その自力鍛錬による精神的錬磨が、武士の精神修養と相通ずるものがあつたからである。また當代に於ける新興の各宗派は、旣成佛敎に對して嚴格なる批判的態度を以て臨み、その敎義は著しく日本的性格を深め、國家的精神の昂揚に資するところがあつた。卽ち日蓮・慧安の如く憂國の精神

に燃えて國難の拂攘に奔走するものが出たことは、かかる精神の具現にほかならない。かくて新宗派の勃興に刺戟せられて、沈滯してゐた舊佛教界にも新たな動向がただよひ來たつた。南都諸宗では、華嚴宗に高辯（明惠上人）が出で、洛西の栂尾に高山寺を營んで宗風を刷新し、法相宗に貞慶が出て笠置寺に入つて修行し、律宗に俊芿・叡尊等が現はれ、前者は入宋して戒律を研究し、後者は戒律思想の宣布を圖り、殊に元寇に際しては國民精神の昂揚に力めた。眞言宗には高野山を中心に學匠輩出し、殊に賴瑜は紀伊根來寺に大傳法院を移して高野山に對立した。天台宗は前代以來朝廷及び公卿と密接なる關係を保ち、愚管抄の著者慈圓の如き名僧を出したが、その宗風は遂に刷新されるに至らなかつた。

學問・文學

三學問・文學　鎌倉時代に於ける國民的意識の昂揚は、日本的なる新宗派を簇生せしめるとともに、學問の方面にも日本的なるものを勃興せしめた。

和學

まづ和學の興隆が注目せられる。和學には、この時代に特色ある發達をなしたものとして、有職故實がある。この學は平安中期以來次第に發達したが、鎌倉時代に入つて武家政治に對して朝政を振起せんとの意識が高まるに及び、必然的にその興隆を見ることとなつた。既述の如く、後鳥羽天皇は殊にこの道に御心を注がせられ、親しく世俗淺深祕抄を著はし給ひ、順德天皇また禁祕御抄を著はし給うた。和學としての古典研究も旺盛となり、下部兼文・兼方父子による記・紀の研究、或は源光行・親行父子の源氏物語校註等が行はれた。歌學にあつては、順德天皇は長くも八雲御抄を著はし給ひ、藤原定家は多くの歌論とともに古今後撰集・拾遺集の註釋を試み、僧仙覺は萬葉集の校訂を行つた。

史書

當代に於ける國家意識の昂揚は、史學の發達を促し、多くの史書が相次いで著述せられた。中山忠親の作と稱する水鏡を始めとし、六代勝事記・五代帝王物語が著はされ、さらに保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記等の戰記物が出づるに至つた。これらの戰記物語は和漢混用の新文體を以て綴られた歷史物語の一種であるが、その題材を式家勃興時代の戰亂にとり、有爲轉變の世相を物語るうちにも、或は佛教的因果の理法を說き、或は陰慘の

中にも一脈の情味を漂はしてゐる。僧慈圓の手に成つた愚管抄は、文學的價値は別として、當時の世態の推移、人心の動向を捉へて古今の史書の中で出色のものであるといふ。なほ幕府の記錄たる吾妻鏡は、幕府に於ける重要な事件を日記體に綴つたもので、一種の編年的史書と見ることができる。

漢學

漢學に於いては、當代に至つて新たに宋の朱子學が受容せられて、斯界に清新の氣を注入した。朱子學は性理の學とも稱せられ、人生に關する哲學的研究と、それに基づく修養を重んずる點に於いて禪宗の影響を受けるところ多く、宋代の禪僧もまた禪儒兼修を旨とした。我が入宋僧もこの風潮に從ひ、儒學を修め、これをもたらし歸つた。そのやうやく行はれたのは當代の末で、僧玄惠は、朱熹の說によつて經書を講じ、北畠親房は玄惠に就いてこれを學んだ。

文學

文學もまた新時代の好尙を反映して清新潑剌たるものとなつた。當代文學として特に異彩を放つものに前記の軍記物語がある。軍記物語について注目すべきものに說話集がある。前代に出た今昔物語ののちをうけて、話柄豐かに興味深き宇治拾遺物語・古今著聞集、敎訓的色彩に富む十訓抄・沙石集等が現はれ、いづれも寓意の典趣、表現の平明を以て人の好みに投じた。また鎌倉・京都間の往來が繁くなるにつれて、十六夜日記・海道記・東關紀行等の紀行文が生まれた。なほ隨筆として著名なものに鴨長明の方丈記がある。

和歌

和歌は京都を中心として盛んに詠まれ、殊に當代の初期には後鳥羽天皇を始め奉り、藤原定家・藤原家隆・慈圓・西行・源實朝の如き歌人が輩出した。後鳥羽天皇は、定家・家隆等をして新古今和歌集二十卷を撰せしめ給うた。實朝は武人でありながら、定家について和歌を學び、特に萬葉の格調に倣つた雄渾の歌を詠んで金槐和歌集を遺した。かくの如く、當代初期には歌道は大いに興つたが、そののちは次第に衰頽に向ひ、類型に墮し、形式に流れてまた誦すべきものを出さず、次の時代に入つた。

學問・文學は主として京都を中心として行はれ、鎌倉武士はなほその敎養に於いて公卿や僧侶に及ばなかつたが、武士の間にも次第に好學の風が張

つて來た。將軍は讀書始・手習始の儀を行ひ、歴代執權もまた政治の要道として修學に志した。時頼は貞觀政要を寫さしめて將軍頼嗣に進め、實時は清原教隆から群書治要の講義を聽き、また和漢の群書を蒐集し、武藏國金澤稱名寺に文庫を立てて一族の研究に資した。下野の足利學校はその創設事情が明らかでないが、恐らくこの時代に足利氏一族の學問所として設立せられたものであると考へられてゐる。武士教育のほかに庶民教育もその萌芽を開き始め、寺子屋が開設せられて、實語經・往來物等が讀習せられた。

藝術の新様相

四藝術　鎌倉時代に於ける新精神は、美術・工藝の方面に於いても顯著に具現せられた。即ち前代貴族文化の優美纖細なるに代つて清新雄勁なるものが復活せられ、これに宋・元の様式が受容攝取せられて新時代にふさはしい新様式が造られたのである。

建築

まづ建築界では、寢殿造りの形式を應用した大規模な神社建築が起つた。嚴島神社客人神社本殿の如きはその代表的なものである。寺院建築には和様・天竺様・唐様の三様式が竝び行はれたがいづれも雄偉豪壯の美を表現してゐる。和様には石山寺多寶塔・京都蓮華王院本堂(三十三間堂)があり、天竺様には東大寺南大門、播磨淨土寺の淨土堂、唐様には圓覺寺舍利殿等の遺構がある。以上の三種の建築様式は、やがて綜合せられて建武年間に建てられた河内觀心寺に見らるるが如き折衷式建築を生んだ。かくて外來の建築様式は和様を中心としつつ漸次日本的に陶冶せられて行つたのである。住宅建築は、當代武士の生活の要求に應じて武家造りが創始せられた。一棟の主殿を數箇の部屋に分ち、正面に玄關を設け、板葺の屋根を以て蓋へるもので、簡素なる武士の生活に適したものであつた。

彫刻

彫刻界は、この時代の初期に行はれた東大寺・興福寺の復興に當つて、佛工達が奈良時代彫刻の遺品に接して得た感激を契機として、復古的な手法が盛んとなり、且つ時代の好尚に投じて、寫實的・個性的表現が重んぜられた。工人には名匠運慶があり、その子湛慶・弟子快慶・定慶・康勝等がそのうけて一門繁榮した。東大寺南大門の金剛力士像は運慶・快慶の作であつて、その雄渾なる彫法は、よく當代の彫刻精神を代表するものである。寫實に

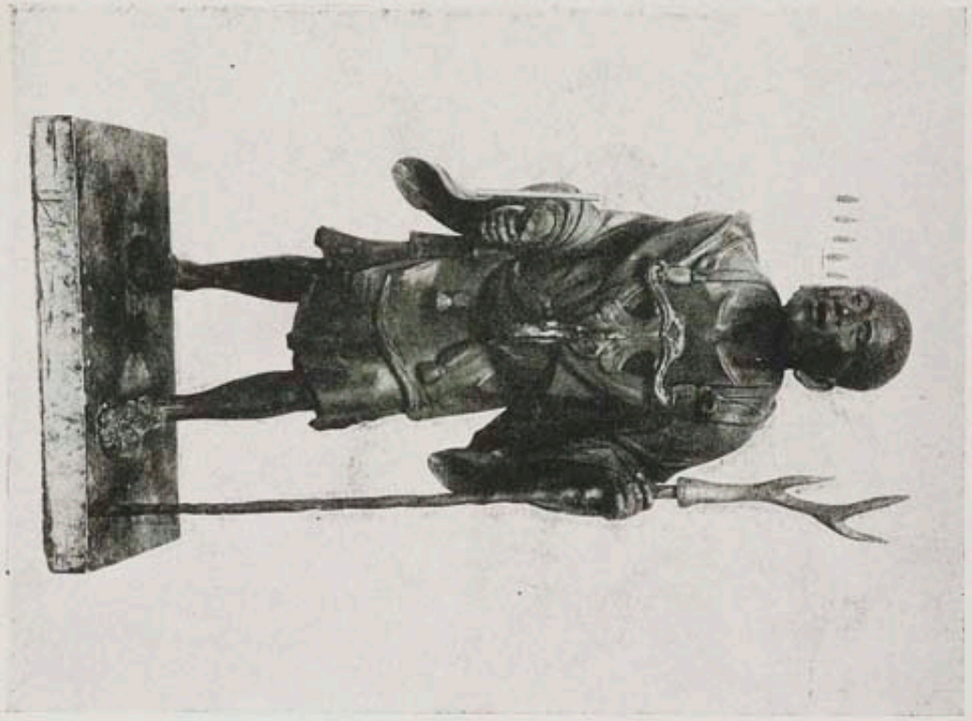
石山寺　多寶塔

圓覺寺　舍利殿

繪畫

秀れたものには、康勝の作になる空也上人像(京都六波羅密寺)があり、東大寺の重源像、鎌倉明月院の上杉重房像等は、いづれも個性の表現に秀れたる肖像彫刻の逸品である。

繪畫もまた、彫刻と同じ方向を辿り、在來の唯美主義から解放せられ、躍動的・現實的・個性的となつた。前代から行はれた繪卷物にあつても、この時代には、その題材が多く戰記文學・社寺緣起・高僧傳より採られ、平治物語繪卷・蒙古襲來繪詞等の戰爭繪卷、北野天神緣起・春日權現靈驗記・淸水寺緣起繪卷等の社寺緣起、法然上人繪傳・一遍上人繪傳等の高僧傳、三十六歌仙繪等が相次いで作製せられた。これらの製作者としては、藤原隆信・信實父子、住吉慶忍・姉小路長隆・高階隆兼・土佐吉光・圓伊等があつた。繪卷物のほかに、個性的なるものの尊重から似繪と稱する個人の肖像が描かれ、花園天皇宸影・隨身庭騎繪卷の如きはその代表的作品である。如上の大和繪のほかに、禪僧によつて將來せられた宋・元風の新らしい畫題と畫趣が繪畫界に異彩を放つたが、これが斯界に指導的役割を演ずるのは次の時代に入つてからである。



大阪藤原家　法性上人像

東大寺開山　俊乘坊重源像

書道

書道にあつては、藤原行成の流れを汲む世尊寺流に對して雄勁なる書風が尊ばれ、これに宋・元の書風が加へられて生まれた新書風が世を風靡した。後宇多天皇・花園天皇・後醍醐天皇はこの書風に長じ給ひ、御運筆暢達にましました。また伏見天皇・後伏見天皇は上代樣の書風に秀でさせられた。伏見天皇の皇子入道尊圓親王は、これら二流の書法を大成せられ、優美にして豐潤なる御書風を開かせられた。江戸時代に一般に行はれた御家流はこの御筆法を受けたものである。

工藝

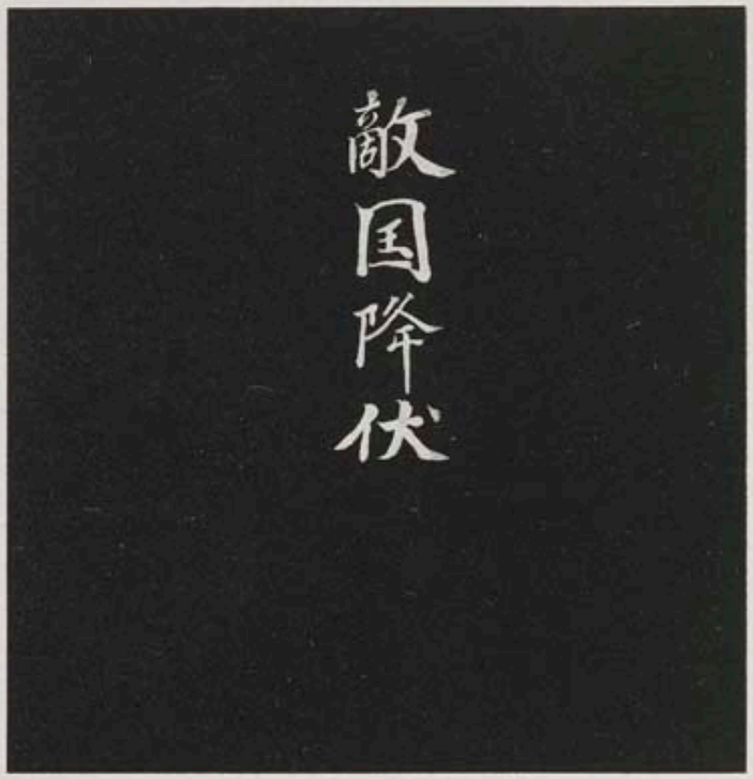
工藝界もまた、武士の需要に應じ、特に甲冑・刀劍等の武具製作にその特殊なる發達を示した。甲冑は、前代末期に既に我が國獨特の華麗なる大鎧の出現を見たが、この時代の初期に明珍が出でてその製作に非凡の手腕を見せ、子孫は長くその技を傳へた。刀劍もまた、その鍛錬がますます精妙となり、名工が多く輩出し、その鋭利は遠く支那にも喧傳せられた。後鳥羽上皇は御親ら菊御作を鍛へ給ひ、また諸國の刀工を召し、月別に番を定めて製作に精進せしめ給うた。かくて鎌倉末期には、京都に粟田口吉光、鎌倉に岡崎

正宗、越中に郷義弘等の名工が現はれて數々の名作を殘した。

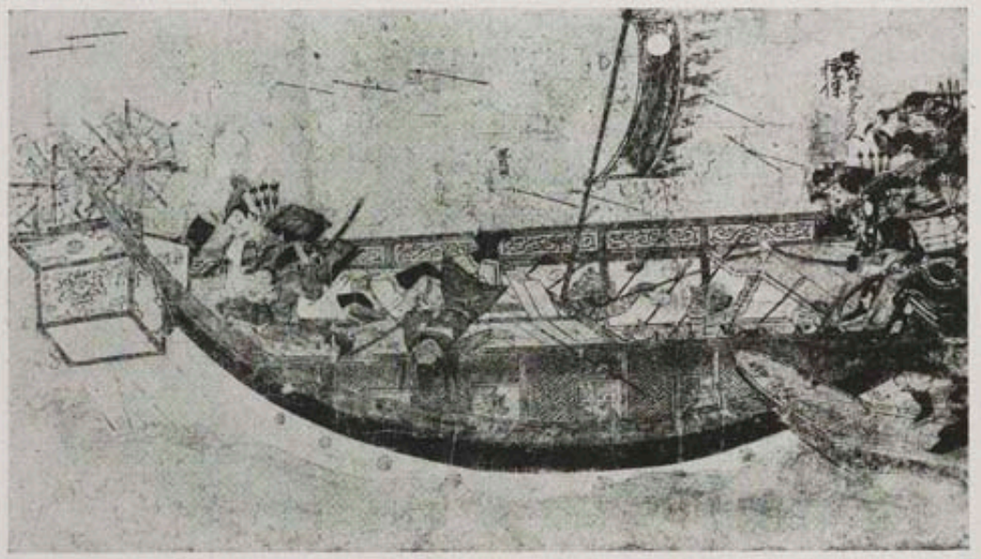
金工は、佛具を主として精巧なるものが製作せられ、漆器にも蒔繪・螺鈿の名作が多く出た。製陶界にあつても、加藤四郎左衛門景正によつて宋の技術が受容せられ、製陶史上に一時期を劃した。瀬戸燒は彼の創始になるものであり、その子藤四郎は新釉藥を發明して黄瀬戸を製作した。また製織の法も宋の技術を攝取して一進歩を來し、彌三なるものが彼の地の廣東織・緞子織を傳習して歸朝し、博多にあつて博多織を創始した。

武家文化の特質

五武家文化の特質　當代文化の主流をなした武家文化の特質は、質實雄勁にして意志的・男性的なる點に存し、且つ現實性・具體性を尊んだが、その中には上代文化とその特質に於いて相通ずるものがあつた。これ當代文化の指導者たる武士は、都心を離れた地に住んで、公卿文化の惡弊に染まず、その精神・生活・環境に於いて尙上代的なるものを保有してゐたがためであり、文化創造の擔當者たる學者・僧侶・工人等もまた武士の好尙に附隨して、その精神を傾倒したためである。さらに當代に於いては意識的にも上代文化の

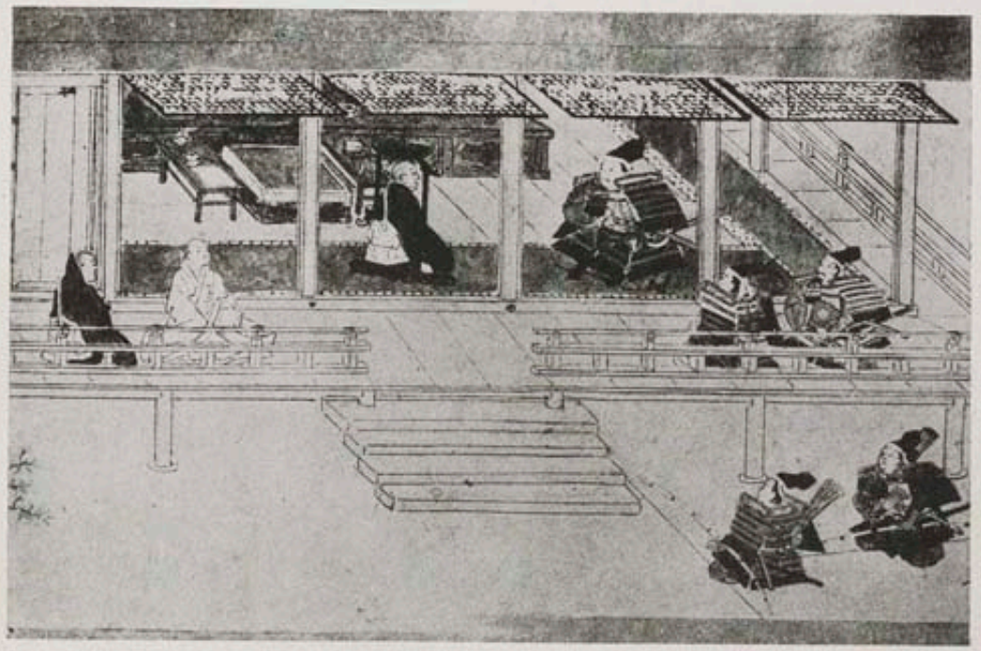


亀山天皇宸筆



蒙古襲來繪詞

春日權現靈驗記繪卷



清水寺緣起繪卷

復活が企てられ、實朝が萬葉の格調を好める、また運慶・湛慶一派の彫刻家が天平の彫法を摸したる、いづれもこの風潮の存在したことを物語るものである。しかし、武家文化の特質はひとり古き傳統にのみ依存してゐるものではなく、一面に於いて時代人の内省と外國よりの刺戟とによること大なるものがあり、當代に於いて著しき發揚を見た國民的意識の如きは、特にその然るを見るのである。

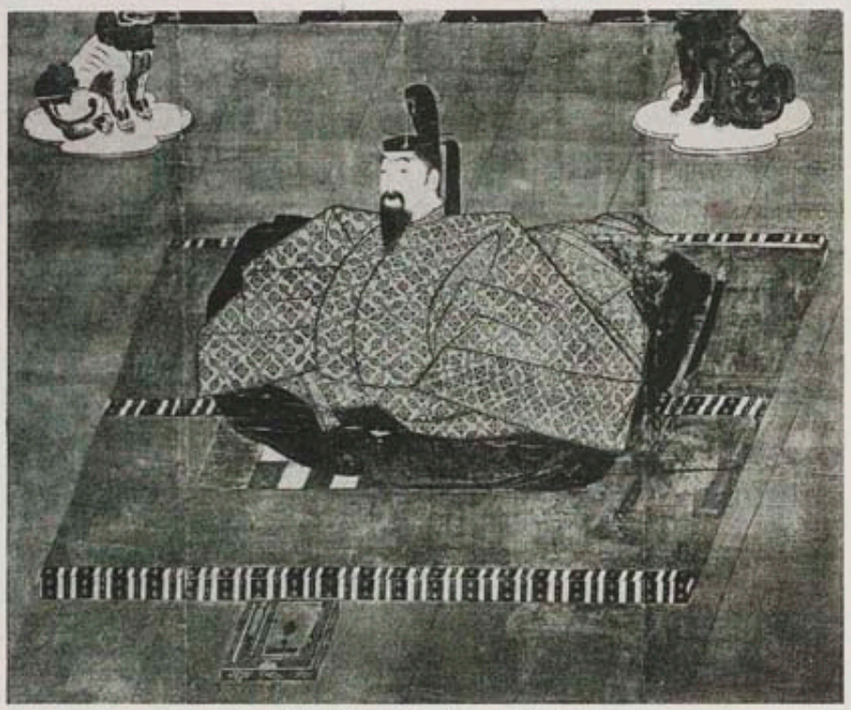
なほ武家文化が、その庶民的性格よりして、文化の普遍化を容易ならしゝ、國民文化の形成に貢獻したことも、その特質として見逃し得ない。

第七章　建武中興と吉野時代

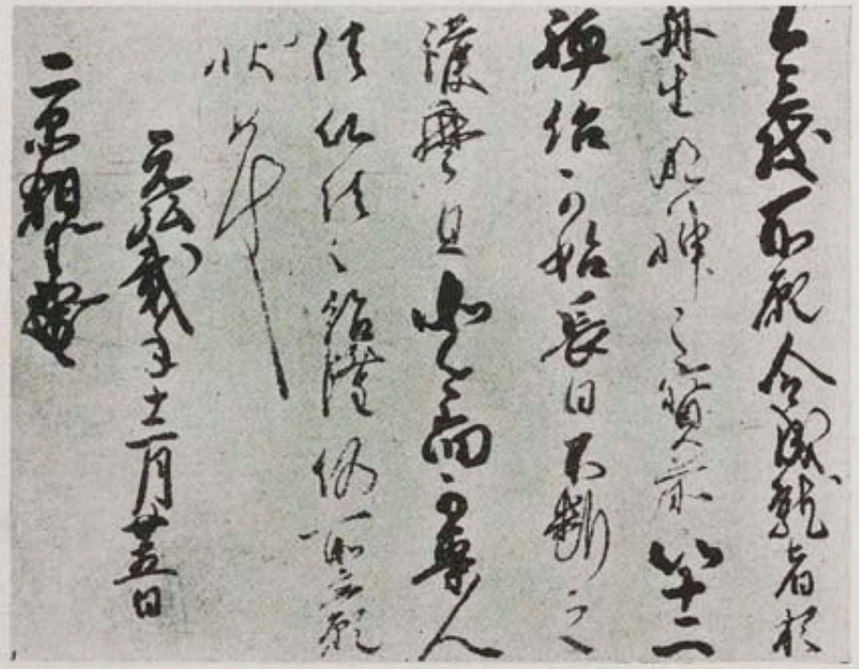
第一節　建武中興とその精神

後醍醐天皇の宏謨

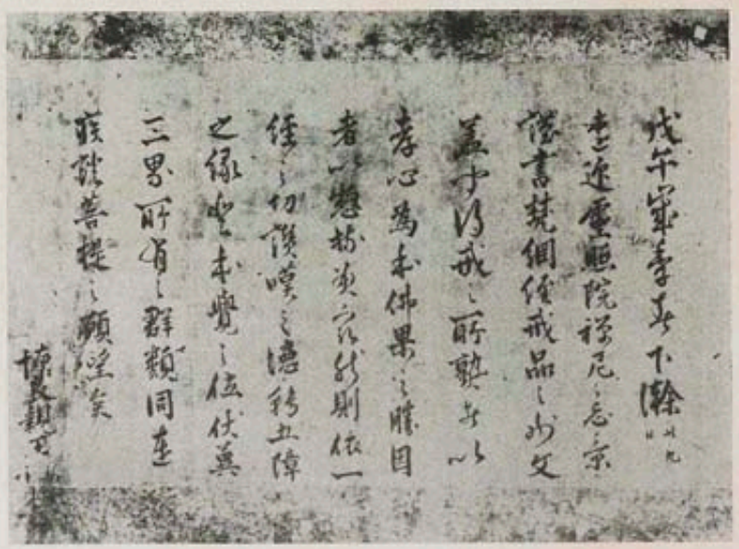
一後醍醐天皇の宏謨　承久三年後鳥羽上皇の御企圖は不幸中道にして破れたが、後鳥羽上皇の御理想は決してそのまゝ消滅したのではなかつた。國民は、幕府の無道なる行爲に悲憤の念を抱き、上皇の御理想を奉戴して他日の捲土重來を期したのである。殊に朝臣の間には、かかる傾向が最も著しかつた。かつて平安時代にあつては、公卿は世の泰平に狎れて文學遊藝と故實典禮とのみをこととし、綱紀の頽廢を見たが、元寇以來頓に昂揚された神國意識は、公卿の強き自覺を促し、武家の政治勢力に對抗せんとする潑剌たる氣力と烈々たる氣魄とを喚び起した。しかるに、幕府に於いては承久の變後、毫も自己の無道と非道とを反省することなく、却つて朝廷を始め奉り、公家に對して干渉壓迫の暴威を振ひ、遂に皇位繼承の問題に際してし



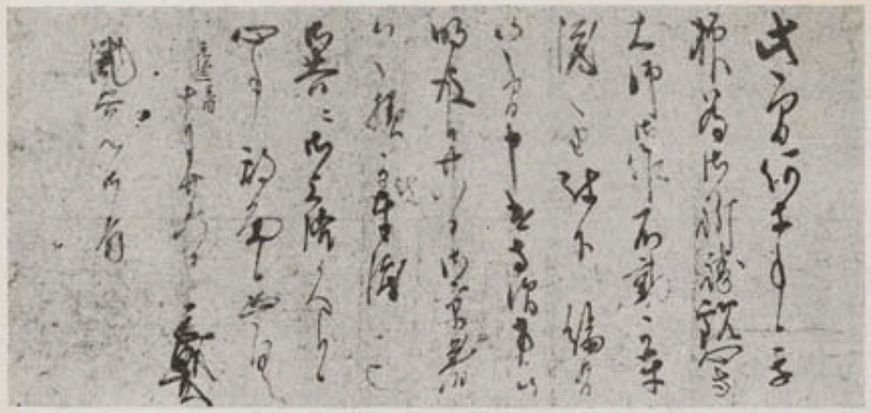
後醍醐御尊皇天皇影



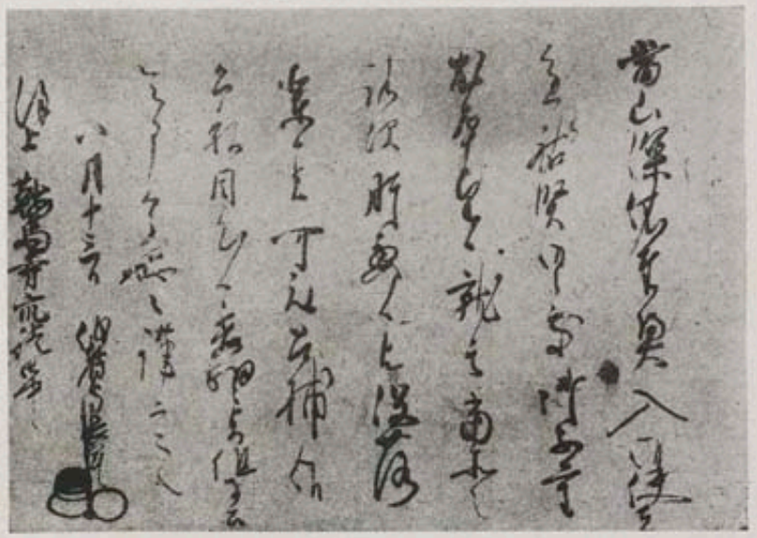
後醍醐天皇御願祈王親良護狀



懐良親王御筆梵網經



楠木正成書狀



名和長年書狀

ばしば干渉的態度をとるに至つた。かくの如きは、我が國體に照らし、許すべからざる非道であり、誠に僭上の極みである。さきに幕府は、元寇の國難に當つて朝威の下よくこれを克服し得たが、未だ自己の非違と時勢の推移とを達觀するの明に乏しく、加ふるに時宗の歿後執權にその人なく、家人統御の策もやうやく宜しきを得ず、また戰後の財政は年とともに窮乏を告げ、幕府の綱紀は亂れて折角昂揚した國民精神も功利貪慾に蝕まれ、武士道も地に墜ちんとするに至つた。

後醍醐天皇

後宇多法皇の聖旨

時に後醍醐天皇は、文保二年（一九八年）御年三十一歳を以て即位あらせられたが、初めの四年間は、御父後宇多法皇が院中に政務をみそなはし給うた。法皇は、朝政の振興を圖らせられ、幾多の人材を拔擢して政道を革新あらせられた。元應元年（一九九年）の評定始めには、「德行才庸を擇んで官職を授けらるべき事。」「仙洞評定衆・傳奏等清撰せらるべき事。」「文學を興行せらるべき事。」等を評定せしめられ、前代末期以來の弊風を匡正あらせられた。やがて元亨元年（一九八年）法皇は二百三十年間に及びし院政を停めさせられ、朝政

は天皇の親裁となつた。

後醍醐天皇は、御幼少の御時より君德の御培養に努めさせられ、御祖父龜山天皇の御膝下に御成育あそばされ、吉田定房を御師父として日夜御學問にいそしみ給うた。そののち御成人あそばされるとともに、學問の御修養はますます深く渡らせられ、朝臣を勵まして政道を興し給うた。ために朝臣も學問の修業に努め、大義を明らかにして氣節を養ひ、忠誠の精神に燃え、政道を輔翼し奉らんとした。

政道御振肅

皇政復古の御企圖

後醍醐天皇は、即位の初めに於いて既に世を醍醐天皇の聖代に復し、ひいては肇國の宏謨に歸つて政治を刷新せんとの御志を懷かせ給うた。されば天皇は、幕府否認の御精神を以て朝政の振肅を期し給ひ、記錄所を復活して政務に御精勵あらせられ、北畠親房・萬里小路宣房・吉田定房・日野資朝・同俊基等を登庸し給ひ、機到れば斷乎討幕の擧を決行して皇政復古の實現を圖らうとし給うたのである。かくて天皇は、資朝・俊基等に御旨を含めてその御企圖を進めさせられ、ひそかに勤皇の武士を諸國に募らしめ給うた。しかるに、正中元年（一九八四年）不幸にもこの御計畫は六波羅探題に洩れ、機密に與つた土岐頼兼・多治見國長等は幕兵のために殺され、資朝・俊基・僧祐雅等は捕へられた。よつて天皇は、一旦の蹉跌により宏謨實現の機會の永久に失はれんことを御憂慮あらせられ、宣房に御旨を含めて幕府に辯疏せしめられたので、俊基・祐雅は放免せられ、資朝は佐渡に流され、辛うじて大事に至らずして終つた。世にこれを正中の變といふ。

正中の變

元弘の變

天皇は、さらに不撓不屈の御決意を以て素志の御貫徹を圖り給ひ、皇子尊雲法親王（護良親王）・尊澄法親王（宗良親王）を相次いで天台座主に補し、南都北嶺等の大社・大寺に行幸あらせられ、また法勝寺圓觀・醍醐寺文觀等の僧侶を參畫せしめ、諸社寺の勢力によつて再擧を企て給うた。しかるに、この御計畫も機未だ熟せざる中に再び幕府の探知するところとなり、俊基・圓觀・文觀等は直ちに幕府に捕へられた。加ふるに幕府は、不遜にも六波羅の兵を發して皇居に迫りまゐらせた。天皇は、畏くも神器を奉じて京都を出で給ひ、叡山に行幸と見せて花山院師賢を代り行かしめられ、山城國鷲峯山金胎寺を經て、笠

護良親王・楠木正成の擧兵

置山に潛幸あらせられた。天皇は、この地を根據として近畿の諸國に勤皇の兵を募らせられた。御召に應じて楠木正成が馳せ參じ、一身を堵して逆賊を退治し、宸襟を休め奉らんとする決意を奏上し、退いて河内の赤坂城に義旗を打ち立てたのは、この時のことであつた。またこの時備後の櫻山茲俊擧兵の報至り、官軍の士氣は頓に揚つた。幕府は卽ち大軍を發して笠置山を攻圍したので、守將足助重範の奮戰も効なく、天嶮の要害も支へ切れずして城は陷つた。天皇は、出でて正成の赤坂城に向はんとし給うたが、賊軍の追求に難を避け給ふこと能はず、遂に幕兵警固の中に六波羅に入らせ給うた。ついで幕府の無道により隱岐に幸し給ひ、皇子尊良親王は土佐に、尊澄法親王は讃岐に遷らせ給うた。幕府は事に參畫せる朝臣・僧侶の處分を行ひ、資朝・俊基・北畠具行・烏丸成輔等を斬り、花山院師賢・萬里小路藤房・同季房・文觀・圓觀等を遠流に處した。世にこれを元弘の變と稱する。

さきに楠木正成は率先して勤皇の兵を擧げ、護良親王を叡山より迎へて賊軍を邀へ討つたが、幕府は精兵を盡くしてこれを攻圍したので、さすがの正成もこれを支ふること能はず、親王とともに暫く姿をかくして再擧の兵を募つた。親王は、この間熊野・大峯・十津川の山間奥地を往來せられ、幾多の御辛酸を嘗め給うて義軍を催され、令旨を諸國に發して勤皇の士の奮起を促がされ、或は吉野に據つて賊軍を防がせ給うた。正成は用兵の妙を發揮し、或は赤坂を回復し、或は攝津渡邊の戰に六波羅の兵を破り、やがて金剛山の中腹に千劔破城を築いてここを根據となし、寄せ來る賊の大軍を一手に引受けて善戰し、よく孤城を支へ、諸國の勤皇將士に擧兵の餘裕を與へた。かくて播磨に赤松則村、伊豫に土居通增・得能通綱等が蹶起し、肥後には菊池武時が出でて鎭西に於ける擧兵の先驅をつとめた。武時は、九州探題北條英時を博多に攻めて壯烈なる戰死を遂げた。

後醍醐天皇隱岐を出でゝ給ふ

後醍醐天皇は隱岐におはしまし、官軍蜂起の情報を聞し召され、元弘三年（一九九三年）閏二月千種忠顯等數人を從へ給ひ、ひそかに隱岐を出でて伯耆に著御あらせられた。かくて天皇は、名和長年の奉迎を受けさせられ、船上山の要害に移り給ひ、綸旨を諸國に下して大いに義兵を募り給うた。やがて忠

顯は兵を率ゐて伯耆を發し、赤松則村と合して京都六波羅に迫つた。幕府は大軍を船上山に送らんとし、足利高氏（元弘三年八月五日尊氏と改む。）名越高家を將として西上せしめたが、高家は忠顯・則村等と山城に戰つて敗北した。しかるに高氏は、豫てより北條氏に對し異圖を懷いてゐたので、丹波に入るや忽ち歸順し、忠顯・則村等の軍とともに六波羅を攻めてこれを陷れた。ここに於いて近畿の大勢定まり、賊軍は多く歸服した。關東に於いては、上野の新田義貞が護良親王の令旨を奉じて蹶起し、結城宗廣また綸旨・令旨を奉戴してこれに呼應し、五月ともに鎌倉を攻めてこれを陷れた。ここに高時始め北條氏一族は自盡し、頼朝の開設した鎌倉幕府は名實ともに倒れた。

足利高氏の歸順

鎌倉幕府の滅亡

後醍醐天皇は、諸國の官軍が次第に優勢となるのを聞し召し、船上山の行在所を出でさせられ、京都還幸の御途に就き給うた。その御途次、鎌倉陷落の捷報を聞し召され、六月内裏に還御あらせられた。後鳥羽上皇の御意志は、永久の變以來百十餘年にして實現せられ、いよいよ建武中興の宏謨が展開せられた。

後醍醐天皇還幸

新政の大綱政治機關の整備

一、建武中興の經緯　後醍醐天皇は、都に還幸遊ばされるや、新政の樹立に著手あらせられ、政治の刷新、皇威の伸張を期し給うた。まづ關白を廢して新政の實を擧げ給ひ、後三條天皇の御代に新設せられた記錄所の權限を擴張して所領に關する訴訟を取扱はしめ給うた。また武者所を設置して京都の警備及び武士の監督に當らしめ給ひ、さらに恩賞方を臨時に設けて、討幕の軍に從ひ新政の實現に貢獻した公卿・將士等に對する論功行賞を審議あらせられた。記錄所を始め行政の府には、定房・宣房等の老練なる公卿及び正成・長年等の誠忠の武將を配し、雜訴決斷所にも公卿・武家の人材を以てこれに當て、武者所には專ら武將を選任して、その頭人には義貞を補し、護良親王を征夷大將軍に任じて軍事を統べしめ給うた。尊氏もまた源家の流れとして中興政治に隱然たる勢力を有し、後醍醐天皇も特に眷顧を加へ給うた。

地方制度

地方制度に於いては、國司と守護とを併置して、公武の調和を期せられた。即ち正成をして攝津・河内を、義貞をして越後・上野・播磨を、長年をして因幡・伯

者を、尊氏をして武藏を管せしめられ、公卿にあつても、洞院公賢は若狹の國司に任ぜられた。中でも奥羽及び關東地方は、僻遠の地にして從來武士の本據たる地なれば、特にその統治に留意あらせられ、北畠顯家を陸奥守に任じ、皇子義良親王を奉じて多賀國府に駐在し、陸奥・出羽二國を管せしめ、尊氏の弟直義を相模守に任じ、皇子成良親王を奉じて鎌倉に赴かしめ、東國の鎮撫に當らしめ給うた。

かくて中央・地方の行政組織は整備せられ、萬機親裁による統一政治の實があがるに及び、翌元弘四年正月年號を建武と改められた。よつて天皇親政による庶政の一新を建武中興と申し上げる。

建武中興の精神

後醍醐天皇は御父後宇多天皇の宏謨を繼承せられ、夙に醍醐天皇の御治世を慕はせ給ひ、これを範として當代の政治を革新せんとの御意圖を抱かせ給うたのである。この御事は醍醐天皇の御代のすべてを範となし給はんとせられたのではなく、むしろ皇威の更張せるこの御代を介して、究極は肇國の精神の顯現を企圖し給うたものと拜察し奉る。

後醍醐天皇の聖旨

後醍醐天皇は、鎌倉幕府を討滅して賴朝以來の武家政治の弊風を除かせられ、斷乎として攝政・關白の制を廢し給うた。この御一事は、萬機親裁の肇國の體制に復歸し給うたことにほかならない。これ建武中興の精神の具現として當然の御事であつた。天皇は、新たに大內裏の造營を開始せられ、年中行事を選定あらせられて、久しきに亙つて亂された朝儀の再興を圖り給うた。さらに貨幣の鑄造を再興あらせられ、建武元年三月詔して乾坤通寶の鑄造を命じ給うたことは、村上天皇以來斷絶したものの復活であり、同時に從來流通せる支那の錢貨を排して國貨による經濟新建設を企圖し給うたものと拜せられる。

建武中興の挫折

これを要するに、建武中興は國體の本義に照らし、復古卽維新の精神の下に展開せられ、政治上の積弊を革め、以て皇道政治の顯揚を期せられたのであつて、先の大化改新、後の明治維新と相通じて一貫する肇國精神の輝かしき發露であつた。

しかるに惜しいかな、中興政治は建武二年早くも瓦解の兆候を生ずるに

至つた。即ち武士は軍功を恃んで恩賞を望み、社寺は祈禱の報謝を求めて自己本位の功利の行動に出でた。かくて當時の複雜多岐な土地制度に煩はされて一所に數人の領主が生ずるが如きことさへ起り、恩賞方の處置は甚だしく圓滑を缺き、雜訴決斷所には士民の訴訟が山積して、裁決に委當を缺くことがあつた。行賞の結果によつて公武・僧侶相互の紛糾を來たし、衆望不平の聲が巷に滿ちて、軋轢抗爭の渦はやうやく大なるものとなつた。即ち公家の一部は、或は徒らに武家政治開始以前の榮華を追想し、或は武士に對する傳統的な高位・高官を誇り、武士はまた中興の功績を自らに歸して公卿を侮る風があつた。また地方武士の大多數は中興精神に透徹することを能はず、むしろ長い間に培はれた武家政治に狎れ、幕府の復興を期待するものがあつた。かくて臣民たるの分を忘れて恩賞の失當を叫び、幕政追慕の念を抱く者が出で、終に中興の大業を挫折せしめるに至つたのである。

大塔宮の令旨

高時法師一族兒徒等、過分之餘奉、輕朝威、太以奇怪、仍所被加征伐也。早追討英時・師賴以下之輩可馳參者、二品親王令旨如此。仍狀如件。

元弘三年二月七日　　左小將隆貞

原田大夫種直跡人々中　　（三原文書）

第二節　吉野時代

尊氏叛逆の前

一吉野の朝廷　護良親王が征夷大將軍の職に任ぜられ給ひ、義貞・正成・長年の諸將もまたその任に從つて中興の大業を輔翼し奉るや、尊氏は父祖以來の宿志たる天下掌握の非望の成就せざらんことを圖れ、密かに策を廻らして幕府の再興を圖つた。親王は、早くも尊氏の野心を察し給うて新政の前途を憂慮せられ、旨を諸將に含めて尊氏排擊の策を講ぜしめられた。尊氏は親王の御態度に脅威を感じ、遂に親王を讒しまゐらせた。ために親王は鎌倉に還らせ給ひ、やがて直義のためにいたましき御最期を遂げさせられた。この時早くも北條氏殘黨の兵を擧げるものがあつた。即ち北條氏は、

中先代の亂

鎌倉に於いて概ね亡びたが、中には逃れて密かに再擧の機會を窺つてゐる

ものがあつた。建武二年（一九九五年）七月高時の遺子時行は、殘黨に擁せられて兵を信濃に擧げ、大擧鎌倉に攻め入つて直義を西奔せしめた。これを中先代の亂といふ。

尊氏の叛逆

京都にあつた尊氏は好機到れりとなし、朝廷に奏して時行の征討と征夷大將軍の拜命を請うた。朝廷では旣に尊氏の野望を知り給うてゐたので、これを許し給はなかつた。しかるに、尊氏は勅許を待たずして東下し、時行の兵を破つて鎌倉に入り、新邸を營んでここに居を構へ、敢へて朝命を奉ぜず、その叛色やうやく濃きものがあつた。やがて心驕れる尊氏は、義貞を討つを名として檄を遠近に飛ばすに至つた。

官軍の奮戰

朝廷では尊氏討伐のため、尊良親王を上將軍とし、義貞以下を副へて東下せしめられ、且つ陸奥の北畠顯家をして背後より鎌倉を襲はしめられたが、義貞は箱根竹ノ下の戰ひで敗れ、尊氏・直義兄弟は、これを追うて西上した。天皇は、一旦東坂本に行幸あらせられたが、顯家の軍が到るに及んで、官軍の士氣は大いに揚り、顯家・義貞・正成・長年等もまた奮戰して賊軍を破り、尊氏を

尊氏の西走

して九州に走らしめた。尊氏は敗走の途次、備後の鞆に至つた時、醍醐寺寶俊の斡旋により、光嚴院より院宣を賜はり、これより持明院統を奉じてその賊名を逃れようとした。九州に於ける勤皇の勇將菊池武時の子武敏・阿蘇惟直（これただ）は、尊氏を邀擊し、必死の抗戰を試みたが、筑前多多良濱の一戰に惜しくも敗れた。尊氏は、直ちに太宰府に入り、再び上洛の準備に著手した。

尊氏の再起

その間、朝廷では尊氏討滅の軍略を議し給ひ、九州の官軍が賊軍と戰へる頃、顯家は義良親王を奉じて陸奥に下向し、義貞は西下して中國の賊軍を擊破した。時に赤松則村は播磨の白旗城に據つて官軍に抗し、急を尊氏に報じてその援を請うたので、尊氏は少貳・大友の諸氏を從へて鞆に至り、直義は陸路より、尊氏は海路より東進した。義貞は、白旗城の圍みを解いて兵庫に還り、事の由を朝廷に報じた。

正成の戰死

朝廷では、尊氏東上の報に接し、急ぎ廷議を開かせ給うた。この時正成は、尊氏の大軍を一旦京都に入れ、しかるのちこれを夾擊するの策を上つたが、容れられず、手兵を率ゐて義貞の軍を援けんがため兵庫に下つた。しかし、

賊軍は大勢をたのんで海陸より官軍を攻撃し、義貞は京都に退いたが、正成は力戰奮鬪ののち、弟正季とともに自刄した。七生報國の誓ひはこの時なされ、絶世の忠臣正成及びこれに殉じた一族郎等六十餘名の英靈は、とこしなへにその忠誠を傳へられた。時に延元元年（一九九六年）五月二十五日のことであつた。

叡山行幸

湊川の敗報が京都に達するや、天皇は叡山に幸し給ひ、義貞・忠顯・長年は、勇戰力鬪して京都の回復に努めたが、長年は洛中の戰ひに壯烈な戰死を遂げ、忠顯は叡山の戰ひに討死するに至つた。これよりさき、尊氏は入京を前に男山八幡に據り、光嚴院及びその御弟豐仁親王を迎へ奉つたが、八月豐仁親王卽ち光明院を奉戴して逆賊の汚名から逃れんとした。

擧兵の勅宣

天皇は、官軍の不振を憂へ給ひ、叡山より勅を諸國に下されて勤皇の軍を募り給うたが、一方他日を期して徐ろに再擧を圖らんとの思召の下に、義貞をして皇太子恒良親王及び尊良親王を奉じて北國に下らしめ、北畠親房をして宗良親王を奉じて伊勢に赴かしめられ、守良親王を九州に派遣あらせられた。かくて天皇は、尊氏の奏請を容れて一旦京都に還幸し給うたが、尊氏は、畏れ多くも天皇を花山院殿に遷し奉つたので、同年十二月天皇は密かに吉野に還幸あらせられ、この地に行宮を定めて朝政をみそなはせられた。

吉野還幸

官軍の情勢

天皇は吉野に行宮を定められるとともに、まづ東國・西國・北國の兵を召して、京都の賊を夾擊してこれが回復を圖り給うた。しかるに、北國では義貞が恒良親王・尊良親王を奉じて兵を擧げたが、尊氏の大軍が攻圍するに及んで、延元二年三月その據城金崎城は陷り、尊良親王は自盡あらせられ、恒良親王は京都へ還り給うた。また陸奥に於いては、顯家が義良親王を奉じて同年八月西上の途に就き、到るところ賊軍を破つて將に京都回復の業を成し遂げんとしたが、翌延元三年五月和泉石津の一戰に惜しくも敗れ、二十一歳を以て皇事に殉じた。ついで同年閏七月官軍の總帥義貞も京都回復の望みを達し得ずして越前藤島に壯烈なる戰死を遂げた。

これよりさき、吉野に於いては、中興以來の忠臣である吉田定房・坊門清忠

は相次いで薨じ、今また官軍の武將枕を竝べて戰死するに至つた。しかしながら天皇は、いささかもこれに屈し給はず、再び諸親王を諸方に派して再擧を圖らせ給うた。卽ち、義良親王・北畠親房・同顯信・結城宗廣を東國に、宗良親王を遠江に、懷良親王を征西大將軍に任じて九州に下し給うた。しかるに、義良親王・宗良親王の御一行が伊勢大湊より船を艤して出發せられるや、間もなく海上颱風に遭遇し、義良親王は、顯信・宗廣とともにやうやく伊勢に難をさけ給ひ、ついで親王は吉野に入らせられた。宗良親王は、遠江に著かせられ、井伊道政及び足助重治等が忠勤を抽きんでた。親房は、常陸に著いて筑波山麓の小田城に據り、やがて陸奥に赴いた顯信とともに東國・奥羽を經略し、東國勤皇軍の中心となつた。

後醍醐天皇崩御

しかるに、翌延元四年天皇は、御病におかされ給ひ、同月十五日、さきに伊勢より吉野に遷啓ありし皇太子義良親王に御讓位あらせられ、「玉骨ハ縱南山ノ苔ニ埋ルトモ魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ。若、命ヲ背義ヲ輕ゼバ、君モ機體ノ君ニ非ズ、臣モ忠烈ノ臣ニ非ジ。」と御遺詔し給ひ、十六日の夜、遂に崩御あらせられた。寶算まさに五十二歳にましました。天皇は、よく中興の聖業を創め給ひ、尊氏叛しては、これが討滅を圖つて、しばらくも朝權恢復・四海泰平の御志を弛め給ふことはなかつたが、御雄志の未だ成らざる中に神去り給うたのである。義良親王は、卽ち後村上天皇にましまし、御父君の御精神竝びに御遺業をよく繼述あらせられ、いささかも屈し給ふことがなかつた。

關東に於ける官軍の衰頽

この頃親房は、常陸にあつて東國の經略に從つてゐたが、後醍醐天皇崩御の悲報に接し、直ちに吉野に馳せ參じて後村上天皇を輔翼し奉らうと念じた。しかるに、東國の形勢は、親房の常陸を去ることを許さなかつた。親房は、陣中にて著はした神皇正統記・職原抄を君德御培養の資となすべく、後村上天皇の御許に上つたのであつた。かかる間にも賊勢は、諸地に猖獗を極めた。興國元年（二〇〇年）賊將高師冬が小田城を攻めるに及び、城主小田治久は、その支ふべからざるを見てこれに降り、また陸奥白河にある結城親朝は、父宗廣の遺訓に背いて尊氏に應ぜんとした。親房は、小田城を出でて關城

に移り、書を親朝に送つて大義を說き、臣節を明らかにすべき旨を勸めたが、親朝は、遂に賊軍に款を通ずるに至つた。興國三年十一月親房は、關城の陷るに及んで吉野に還つた。しかし、顯家の子顯信は、獨り陸奥にあつて宮方の中心となり、東北の官軍を率ゐて賊軍に對抗した。

懷良親王の九州御經略

これよりさき、延元元年懷良親王は、後醍醐天皇の勅を奉じて九州へ向はせられたが、久しく九州に入ることができず、讚岐・伊豫にあつて鎭西の情勢を觀望せられてゐた。興國三年薩摩の谷山城に入り、まづ薩摩・大隅を定め、菊池武光の助力を得て正平三年（二〇〇八年）肥後に進み、ついで肥前を平定あそばされた。親房は、吉野にあつて九州・東國の官軍と呼應し、京都の回復を計り、正平二年八月楠木正行及びその一族とともに兵を起し、河內・攝津に賊軍を破り、將に京都に迫らんとしたが、翌三年正月五日高師直・師泰の大軍と四條畷に戰つて利あらず、正行は、遂に壯烈な戰死を遂げた。師直は、進んで吉野の皇居を犯し奉つたので、後村上天皇は、難を避けて賀名生（あなふ）に遷幸あそばされた。興國以來九州を除いて諸地方の官軍は、その勢力の衰頽を見るに

官軍勢力の衰頽

至つたが、正平七年四條隆資は、男山八幡で戰死し、また同九年親房が薨ずるに至つて、朝廷帷幄の計畫も意の如くならず、官軍の勢威はますます振はなくなつた。

足利氏の內訌

一方足利氏に於いては、その幕下に大軍を擁したにも拘らず、もとより功利のともがらの集りなれば、一族部將の內訌絕えず、これが統御に苦慮した。足利直義は、兄尊氏を助けて大功を樹てたが、兄弟の不和はやうやく萌し、高師直は、その功を誇つて直義とよからず、直義は尊氏の子直冬を養子として外援とした。その結果、師直は直義に滅され、尊氏はまた直義を殺し、直冬は直義の遺志を繼いで父尊氏と爭ふに至つた。かかる風潮は、部下諸將の間にまで浸潤し、足利氏の勢力は常に動搖した。かくて强大を誇つた賊勢も次第に脆弱となり、いづれも己が利害關係を計つて離合集散し、遂に朝廷に降つて僅かにその勢威を保ち得たのであつた。官軍では、その都度勢力を盛り返して京都の回復を企て、正平七年・同八年・同十年・同十六年の四回に亙つて京都に入つたが、これを維持する實力がなかつた。

後龜山天皇京都還幸

足利氏の亂脈も、尊氏の死後義詮を經て義滿の代となり、細川頼之の輔佐を得てやうやく部下の統御に成功したが、長年に亙る賊の汚名を蒙ることは、足利氏に於いても忍び得ざるところであつた。元中九年（二〇五年）義滿は、後龜山天皇に對し奉り、京都還幸の儀を奏請した。天皇は、多年の戰禍に苦しむ國民の憂苦に大御心を垂れさせ給ひ、これを聽許あらせられ、同年閏十月神器を奉じて京都に還幸し給ひ、後小松天皇に御讓位あらせられた。後醍醐天皇吉野に還幸ましましてよりここに五十餘年、中興の大業に參畫し、終始勤皇の誠を致した幾多の忠臣匪躬の遺烈は、とこしへに國史の上に燦として輝くのである。

建武の大業

二勤皇の美績　建武中興の聖業は肇國の大理想の實現である。この大理想は、後醍醐天皇によつて顯現せられ、吉野時代御歷代の天皇及び後醍醐天皇の諸皇子は、よく中興の聖旨を體し給ひ、尊き御身を以て討幕に挺身あそばされた。また幾多忠勇義烈の士が一切を犧牲にして君國に奉じたことは、國民のひとしく感激するところであつて、かかる忠良賢哲の精神・行實は、とこしへにわれわれ國民とともに生き、その勤皇の精神は、皇基を固くするものである。

國體の尊嚴

兵力に於いて微々たる朝廷が、五十餘年の間、吉野にあらせられたことは、御稜威のもと崇高なる我が國體の具現にほかならない。朝廷が堂々と大義名分論を中外に宣揚あらせられたのに反し、足利氏はその行動を正當化すべき論據を有しなかつた。これ實力に於いて優位を占める足利氏が、吉野の朝廷の存在に最も苦慮した所以である。足利氏の一族及び部將は、何か不平を抱けば、その權勢を維持せんがために朝廷に歸順を乞ひ奉るを例とした。尊氏を始め直義・直冬及び足利氏の部將の多くは、かくすることによつて自己の不滿を慰し、權勢を保ち得たのである。しかるに、彼等の行動は、その根本に於いて大なる誤を犯してゐた。正平六年の頃朝廷と足利氏との間に行はれた和議の交渉に於いて、直義は、武家政治の成立を是認し、延武中興の大業が三年を經ずして挫折した所以は、武家の勢威を輕視したにあるとなし、武家政治の存立を勅許あらせられんことを請ひ奉つたが如き

足利直義の武家政治觀

は、その甚だしいものであつた。

朝廷の御態度

朝廷に於かせられては、この點に於いて一歩も讓り給はず、大勢を制する足利氏が歸順せざる限り、國内統一は不可能であるとなし給ひ、官軍の形勢が如何に非であらうとも、終始その御態度を改め給はなかつた。朝臣のうち、かかる意見を最も强硬に主張したのは北畠親房であつて、彼の烈々たる國家的精神は、神皇正統記に滿ち溢れてゐる。されば、朝廷に於かせられては、吉野の小天地に跼蹐し、幾多の艱難辛苦を克服あそばされ、五十餘年の間大義名分を宣揚あそばされたのである。元中九年十月、義滿に至つて還幸を請ひ奉つたとき、後龜山天皇が、神器を奉じて御入洛あらせられ、後小松天皇に讓位の儀式を以てこれを授け給はんことを以てその第一條件とあそばされたことは、嚴たる我が國體のゆるがせにすべからざる所以を御示しになつたものと拜察し奉る。

朝臣の勤勢

この崇高なる歷代天皇の聖德及び御行實は、當代に於ける武將の勤皇精神を鼓舞する根源となり、しかして勤皇の諸將たちは、中興の聖業翼贊のためよくその忠誠を捧げ奉り、しかもその多くは、祖孫兄弟相承けてその遺志を繼ぎ、如何なる苦境に陷るとも毫も節義を變ぜずして皇事に殉じ、以て五十餘年に亙る頽勢を支へたのである。しかしてこれら朝臣の精神は、當代文化の上に反映し、後代の人心に大いなる影響を與へた。神皇正統記・增鏡・大平記・新葉和歌集・李花集等は、いづれもその純なる精神の所產である。神皇正統記は、まさに親房が宏謨翼贊の神髓を吐露せる血涙の結晶である。

勤皇文化

神皇正統記

新葉和歌集

新葉和歌集は、宗良親王が後醍醐天皇の元弘元年より御三代五十年に亙る御製・御歌を始め奉り、諸忠臣の和歌を撰集あらせられたもので、忠勇義烈の歌に富み、憂國の精神に滿ち溢れてゐる。その崇高なる敍情は、まさに神皇正統記の堂々たる論策と相應じ、吉野時代の精神を發揚せる双璧をなすものである。

太平記

太平記は、四十卷の大冊より成り、よく後醍醐天皇の御理想を寫し奉り、諸忠臣の精神・行實を描き出したる勤皇文學にして、その豐麗なる詩藻は讀むものをして感動奮起せしめずにはおかない。史書としても軍記物としても當代に於ける有數の大著作である。

勤皇精神の永遠性

國民の血にひそむ勤皇精神は、戰國時代に至つて勤皇武將を生み、江戸幕末に至つて勤皇志士を興起せしめた。神皇正統記・新葉和歌集・太平記等にしのぶ忠勇義烈の事歴が尊皇精神を鼓舞し、志士を奮起せしめたのである。大日本史・日本外史等の史書は、神皇正統記の精神を酌んで編述せられた。新葉集の歌は、幕末に刊行された幾多の編著に引用せられて志士の肺腑を剔り、梅田雲濱は、これを愛誦して疊に下すことさへ戒めた。高山彦九郎は、太平記を讀んで勤皇の志を立て、吉田松陰は、これを座右の書としたといふ。かくて吉野時代忠臣の枯骨は、新たに蘇生し、その氣魄は磅礴として國民全體に傳はり、建武中興の精神は、明治維新の大業を完遂せしめる有力なる因由となつた。

後醍醐天皇の御遺詔

延元四年八月九日ヨリ、吉野主上（〇後醍醐天皇）御不豫ノ御事有ケルガ、次第ニ重ラセ給フ。

〇中略　主上苦ゲナル御息ヲ吐セ給ヒテ、妻子珍寶及王位、露命ハ時ノ間、是如來ノ金言ニシテ、平生朕ガ心ニ有シ事ナレバ、秦穆公ガ三良ヲ埋ミ、始皇帝ノ寶玉ヲ隨ヘシ事、一モ朕ガ心ニ取ズ。只、生々世々ノ妄念トモ成ベキハ、朝敵ヲ悉亡シテ四海ヲ泰平ナラシメント思フ計ナリ。朕卽早世ノ後ハ、第八宮ヲ天子ノ位ニ卽奉リ、賢士・忠臣事ヲ圖リ、義助ガ忠功ヲ賞シテ、子孫不義ノ行ナクバ、眦股臣トシテ、天下ヲ鎭ベシ。是ヲ思フ故ニ、玉骨ハ縱南山ノ苔ニ埋ルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ。若、命ヲ背、義ヲ輕ゼバ、君モ機體ノ君ニ非ズ、臣モ忠烈ノ臣ニ非ジ、ト委細ニ綸言ヲ遺サレテ、左御手ニ法華經ノ五卷ヲ持セ給ヒ、右ノ御手ニハ御劍ヲ按ジテ、八月十六日丑刻ニ崩御ナリニケリ。

（太平記卷二十一）